

総務建設常任委員会視察報告

総務建設常任委員会は、去る 5 月 27 日から 29 日までの 3 日間、宮城県美里町、岩手県陸前高田市及びオガール紫波を訪問し、次のとおり視察を実施しました。

○視察日

令和 6 年 5 月 27 日（月）、28 日（火）、29 日（水）

○視察地及び視察目的

1 宮城県美里町

- ①デマンドタクシー、コミュニティ事業、地域おこし協力隊について
- ②自主防災事業について

2 岩手県陸前高田市

- ①民泊修学旅行の仕組みについて
- ②グリーンスローモビリティとデマンド交通について
- ③免許返納者の増加による公共交通の必要性を想定した市予算の見通しについて

3 岩手県オガール紫波

オガールプロジェクト（公有地活用や複合開発、デザインガイドライン、公民連携手法等について）

○視察者

近藤昇一委員長、山田由美副委員長、三浦大輝委員、笹本貢史委員、中村和雄委員、荒井直彦委員、土佐洋子委員 伊東圭介議長（オブザーバー）
（随行者：行谷友良事務局長）

○視察の概要

1 宮城県美里町（5 月 27 日）

（1）町の概要

美里町は平成 18 年に小牛田町と南郷町が合併し発足した、面積 74.99 km²、県都仙台市と 40 km の距離にある農業が基幹産業の町である。

- ◎人口 23,024 人（令和 6 年 5 月 1 日現在）
- ◎世帯数 9,381 世帯（令和 6 年 5 月 1 日現在）
- ◎令和 6 年度当初予算規模（全会計 248 億 6,643 万 7 千円）
一般会計 144 億 6,970 万 1 千円

特別会計(3会計)59億8,526万6千円

企業会計(3会計)44億1,147万円

◎議員定数：13人（令和3年4月より16人から変更）

（２）視察の概要

◎平成20年4月から道路運送法の許可事業者として運行していた住民バスのうち2路線の運行が終了するにあたり、平成27年度から運行開始をしているデマンドタクシーの現状と課題について

◎美里町を大きく6地域に分け、それぞれにコミュニティ活動の拠点となる施設があり、そこで実施されている地域や団体の特色を生かした活動について

◎美里町においても人口減少や高齢化等が進行しており、地域外の人材を積極的に誘致し、定住、定着を図るとともに地域の活性化等を促進するため、令和4年度から採用している地域おこし協力隊について

◎自主防災組織数が58組織、組織率100%の自主防災事業について

以上、4点について美里町まちづくり推進課及び防災管財課職員より説明を受け、質疑応答を行った。



町役場での視察の様子

2 岩手県陸前高田市（5月28日）

（１）市の概要

陸前高田市は、隣接する大船渡市や宮城県気仙沼市とともに三陸海岸のう

ち陸前海岸北部の中核を成す。東日本大震災の津波により甚大な被害を受け、復興や内陸への市役所移転など先を見据えた防災、減災に取り組んでいる。面積は 231.94 k㎡でその約 7 割が森林を占めている。

◎人口：17,424 人（令和 6 年 4 月 30 日現在）

◎世帯：7,581 世帯（令和 6 年 4 月 30 日現在）

◎令和 6 年度当初予算規模（全会計 266 億 6,927 万円）

一般会計 169 億 5,000 万円

特別会計（3 会計）52 億 3,887 万円

事業会計（2 会計）44 億 8,040 万円

◎議員定数：16 人（令和 5 年 9 月より 18 人から変更）

（２）視察の概要

◎東日本大震災で甚大な被害を出した陸前高田市で“千年に一度の震災は千年に一度の学びの場へ”と題した、民泊修学旅行の現状と課題について

◎市役所を中心に道の駅やショッピングモールを回り、地域のコミュニティの場としても利用されているグリーンスローモビリティと地域別に運行会社を割り振っているデマンド交通について

◎免許返納者の増加による公共交通の必要性を想定した市の予算の見通しについて

以上 3 点について、陸前高田市まちづくり推進課及び福祉課職員より説明を受け、質疑応答を行った。

また、陸前高田市への移動の際に震災遺構大川小学校にて、当時小学校で津波により命を落とした児童の父親の講話を、陸前高田市での視察後には津波伝承館に場所を移し、県職員より東日本大震災の発災から復興に至るまでの対応、取り組み等について説明を受けた。



市役所前に停車中の「モビタ」



市役所での視察の様子



震災遺構大川小学校



津波伝承館で職員より説明を受ける様子

3 オガール紫波（5月29日）

（1）オガール紫波の概要

J R 東北本線紫波中央駅前の町有地を中心とする都市整備事業で、「オガール」は「成長」を意味する紫波の方言「おがる」と「駅」を意味するフランス語「ガール」を合わせた造語。平成 21 年から始まった町有地における官民連携のプロジェクトも平成 29 年に保育園の開園をもって施設整備は一段落した。

施設内には、役場、図書館、スポーツ施設、医療施設、飲食店、ホテル、子育て支援施設、公園など生活に必要な施設が集積している。

◎オガール紫波の敷地面積 10.7ha

◎紫波町（岩手県のほぼ中央、盛岡市と花巻市の間に位置する）

面積 238.98 km²

人口 32,760 人（令和 6 年 5 月末現在）

世帯数 12,994 人（令和 6 年 5 月末現在）

（2）視察の概要

「農村と都市が共生するまち」、「若者・高齢者全ての人が希望を持ち、安心して暮らせるまち」、「人にも地球にもやさしいまち」、「優れたデザインの作用」を開発テーマに、P F I 手法で整備された町役場をはじめ、日本初のバレーボール専用体育館、ホテル、コンビニや飲食店が 10.7ha に集約されたオガールプロジェクトについてオガール企画合同会社より説明を受け、質疑応答を行った。また、各施設の視察も併せて実施した。



オガール紫波内にある紫波町役場 1 階ロビー



オガール紫波の全景



紫波町役場庁舎

◇委員所感

< 近藤委員長 >

宮城県美里町

美里町では、コミュニティ事業、地域おこし協力隊、デマンドタクシー、防災行政無線などについて説明を受け、質疑応答を行いました。

美里町の出前講座は 38 の講座を町民に示し、出前講座の存在を知ってもらい、利用してもらおうとアピールしています。

葉山町の場合、出前講座を行っていると言いますが、講座を示していません。町政の課題などを町民に知ってもらうためにも、講座を示し出前講座の存在を町民に周知すべきではないかと思いました。

デマンドタクシーについては、葉山町でも実証実験を今年度行いますが、先

進事例として運行区域の利便性や予約申し込み方法など、様々な課題があることを認識させられました。

岩手県陸前高田市

陸前高田市では、グリーンスローモビリティとデマンド交通について視察を行いました。

こちらのデマンド交通についても予約方法などで課題を抱えているということでした。料金は中学生以上 300 円、小学生・介護人 150 円、未就学児・身障者無料となっています。葉山町での実施にあたって料金設定をどのようにするのか。高齢者の足を確保するというのが目的ならば、料金設定にその趣旨を盛り込むべきではないかと思います。

岩手県紫波町

紫波町では、公有地を活用した複合開発施設である「オガール紫波」の説明と現地の案内をしていただきました。

紫波町では駅前に 10.7 ヘクタールの塩漬け土地を活用し、官民の連携によって公金の支出を抑えて複合開発施設を建設した経験を学ばせていただきました。

街並みはすべて電線地中化されスッキリしたものとなっていました。残念ながら街区のはずれに高圧線の鉄塔が立っていてせつかくの景観を台無しにしていたのは残念でした。

葉山町の場合、これほどの大きな塩漬けの土地はないものの、利用目的の定まっていない塩漬けの土地もあります。これらの土地の利活用はこの経験を生かせないものか考えました。

<山田副委員長>

美里町

●デマンドタクシーは民間タクシー会社に委託、電話予約制、1 乗車 200 円。通院利用が多いのでピークは午前中。午後はほとんど利用なし。

●町の南半分にあたる南郷地域のみで国など関係機関に申請しているので、区域外利用（北部の小牛田地区への移動）は不可。スマホでのオンライン予約は今後の課題。ガラケーでも利用可能にする予定。

●地域おこし協力隊は令和 4 年から。会計年度任用職員の形。最長 3 年の期間内で、自分のしたいことをする。町の P R や、町民同士の横のつながりを作るなど。活動費は町の負担。現状は独身の人のみ。3 年後の定住を条件にはして

いない。

- 自主防災については、消防団員の平均年齢が 52 歳、団長は 72 歳。高齢化で担い手不足なので、吉本興業とタイアップして「二十歳を祝う会」などで P R している。
- セーフティタワーに水道水を貯蔵、災害時は塩素消毒してから電源不要で使える。消防用にも使用できる。
- 昔は海だった沖積平野。川にはさまれた土地なので浸水の危険があり、9 分団にゴムボートを装備。取り残された高齢者の救助など。
- 防災無線が聞こえない場合は、内容を電話で聞ける。戸別受信機はトータルで 500 軒ほどが利用してきたが、スマホに切り替えていく方針。
- 災害時、電源なしで使える貯水施設は、葉山でも役に立つのではと思われる。

石巻市大川小学校

- 現場を見て、ご遺族の話を伺うことで、人災の面が強かったことを納得した。ハザードマップが不完全であり、教職員が認識不足だったことが悲劇につながった。校庭に留まらず、背後の山に登りさえすれば、多くの人命が救われたと推測できる。日頃の備えが絶対に必要と改めて認識した。

陸前高田市

- 大震災後、中心市街地は 10m かさ上げた。ハード面の復興はほぼ終了し、災害公営住宅は市営住宅に切り替えた。住民が高台に移転したので、交通手段の確保が必要。
- 元々観光の町だったので、キャンプ場も整備している。岩手の湘南と呼ばれていた。マリンスポーツも盛んにしたい。通過型の観光ではなく、滞在型の観光を目指す。陸前高田市のファンを増やしたい。
- 2016 年にスタートした民泊修学旅行（農泊）では、子どもたちが震災や防災について学びながら、受け入れ家庭で農業体験をしたり、一緒に夕食を作ったりする。1 人 1 万円の体験料をもらい、受け入れ家庭に 5,000～6,000 円の費用を払う。受け入れ側の高齢化のため、登録件数は 100 軒を切った。また、再建した家では、元の家より部屋数が少なくなっているので、大勢は泊められない。トータルでのべ 1 万人が利用している。大学生や企業の利用もある。
- グリーンスローモビリティの「モビタ」に試乗させて頂いた。運転手を含めて 7 人乗り。一台 1,600 万円で 2 台稼働。窓ガラスがなく透明ビニールで覆われているだけなので、冬は寒い。時速 20 キロ未満で走り、住民同士や運転手との触れ合いの場となっている。平日（月、火、水で団地ルート、1 乗車 100 円）

は町民の利用向けで、土日は観光客向け（道の駅から、500 円で 1 日乗り放題）になる。

●デマンド交通はタクシー会社に委託。1 乗車 300 円。月毎の実績で委託料を支払う。自宅まで送迎してくれる。目的地では停留所利用。病院や商店をカバー。前日までに電話かファックスで予約。利用は減る傾向。前日予約が負担になっているかもしれない。ルート変更ができるように検討している。タクシー券利用とかぶっているかもしれない。

●タクシー助成は、エリアごとに、距離に応じた利用券を交付する。ふるさと納税で集まった資金（令和 4 年度は 10 億円の実績。事業者が返礼品を磨いている。リンゴ、カキ、ウニなど）を活用している。タクシー券利用時に、本人確認はしていない。

●デマンド交通やタクシー券は、路線バスとコミュニティバスに更に付け加えたもの。町民の選択肢を増やす方針。コミュニティバスの利用は回復している。

●路線バスは 1 乗車 200 円の定額で、市の補助が入っている。国土交通省の交付金がある。通学と通院がメイン。

●車を失うと不便になるので、高齢者が免許返納をためらう傾向がある。返納によって認知症の進行が早まる傾向もある。

●運転手不足を見据えて、ボランティアにドライバー登録してもらい、週 1 回の「ささえ合い交通」を実施。地域ごとに曜日が決まっている。リース車両に市が補助していて、運賃は無料。事前登録必要。

●葉山でも町民の足は必要なので、タクシー券などの参考にしたい。

オガール

●官民連携の手本。新駅誘致に伴い、JR の要請で、紫波町が駅前の土地を確保していたことからスタート。藤原前町長と、岡崎正信氏というキーマンが中核となった。岡崎氏の持論「まちづくりとは、不動産の価値の向上である」は卓見。魅力ある町を作れば、人が集まってくる。

●5 人の専門家を集めたデザイン会議が施設設計やデザインの調整などを行い、全体のイメージをまとめた。

●容積率から施設の大きさを決めるのではなく、入ってくれるテナントを求めるところから計算を始め、人口 3 万 3 千人ほどの町の規模に合った適正な施設を目指した。外来客より、町民の利用を主体にしている。

●役場庁舎、図書館、保育園、クリニック、マルシェなどの複合施設。フットボールセンター、バレーボール専用体育館、バイオマスで地域に熱供給するエネルギーステーションなども設置。

- 周辺の住宅用地も役場が販売した。国庫補助が入り、入居企業や住宅地 57 区画からの固定資産税も入るので、建設費の回収はできている。もしもの場合に備えて、町の財産を失わないよう「倒産隔離」することが必要と教わった。
- 役場庁舎は木造 3 階建てで、内装も美しい。図書館は天井が高くて居心地がよく、展示センスも素晴らしい。天気の良い日は、中庭でランチや休憩ができる。子どもたちの登下校のルートにもなっている様子。
- 最初の 1 年は、町民に対して 50 回くらいの説明会を行った。トータルでは 100 回くらいの議論を行った。そのうち 30～40 回くらいは町長も参加した。議会も議決したので、町全体で推進することができた。
- 第 2 種住居地域として、全体に地区計画をかけ、ここは公共エリアなどと決めている。
- 葉山ではまとまった土地がないので、同じことはできないが、民間の力を最大限に利用する方法は、資金面からも継続性からも望ましい。

<三浦委員>

宮城県美里町

(内容)

コミュニティ事業：美里町は、大きく 6 つの地域に分かれており、それぞれに地域コミュニティ活動の拠点となるコミュニティ施設がある。これらは、地域住民で組織された協議会やシルバー人材センター等の団体が指定管理者であり、特色をいかした活動を行う。

地域おこし協力隊：令和 4 年度から地域おこし協力隊を採用し、導入当初は「地域のお手伝いをするひと」という誤解があったが、少しずつ町民の活動への理解が得られてきた。町のプロモーションとして、町花のバラをいかしたイベント等を主催。

デマンドタクシー：平成 27 年より南部の南郷地域にて運行している。1 乗車につき 200 円、小学生以下、障害者およびその介護者は無料となっている。運行業務は地元タクシー会社に委託し、3 年間の契約。現状は電話での予約になっている。

自主防災：地域防災についての意見交換会を 4 か月で 6 回実施。移動系防災無線の通信無線訓練は年 1 回。また、自主防災組織への講師派遣をしている。防災訓練の一環として、避難所運営ゲーム（HUG）などゲーム形式を取り入れている。

(所感)

- ・特に地域おこし協力隊の活動は印象的であった。若い方が移住を前提に、地域と溶け込み様々な活動をされていた。町花のバラを PR するために町民の方の家を開放していただき、イベントを主催したり、バラに関係する町民を集めて交流会を実施したりするなど精力的な活動が目立っていた。また、SNS アカウントも開設し独自の発信をするなど参考になる点も多かった。

岩手県陸前高田市

(内容)

民泊修学旅行：陸前高田の民泊ではホテルや旅館、民宿への宿泊とは異なり、一般家庭に数日宿泊する。はまって会という入村式からはじまり、食事は民家の方と一緒につくる。暮らし体験の一環として農作業の体験なども組み込まれている。短い滞在時間でも、生徒と受け入れ家庭には確かな絆が生まれ、非常に満足度の高い事業となっている。運営は特定非営利活動法人 SET という法人が引き受け、学校側との打ち合わせや受け入れ家庭の手配をしている。コロナの影響で 2022 年までは受け入れ数が落ち込んだが、2023 年からは回復傾向にある。

グリーンスローモビリティとデマンド交通：デマンド交通は月当たり 66 から 122 名の利用者がいる。グリーンスローモビリティは 213 から 537 名の利用者がいる。

(所感)

- ・民泊修学旅行の取り組みは大変興味深いものであった。また受け入れをする家庭が 100 軒近くあるということも驚きだった。受け入れ側にとっても思い出ができるだけでなく、多少の報酬もうまれるとのことで、持続可能な仕組みだと感じた。葉山においても今後インバウンド観光なども見込まれることから、こうした民泊の事業は参考になると感じた。

- ・震災から 13 年が立つ中、陸前高田市の復興状況についても視察を行い、奇跡の一本松をはじめとし高田松原津波復興祈念公園を伺った。展示館では津波に流された車などの展示があり、あらためて津波の脅威を感じた。

岩手県紫波町

(内容)

オガールプロジェクト：公有地における公民連携の実践事例として全国から注目を集めている。東北本線紫波中央駅前の町有地 10.7ha を中心とする都市

整備事業のことで、「オガール」は方言をあわせた造語。役場、図書館、スポーツ施設、医療施設、産地直売所、飲食店、住宅、ホテル、子育て施設、公園など暮らしに必要なあらゆるものがこの地域に集積している。29年度は同エリアの利用者数が約96万人に達するなど着実に成果が表れているが、中心部の賑わいをまち全体に波及させるという目標にむけて、挑戦を続けている。

（所感）

・現地を視察して感じたのはものすごくデザインされた空間であるということ。例えば飲食店が何店舗かテナントで入っているが、一般的なテナントビジネスと違い、建物を建設する前に飲食店から広さや設計、予算等のヒアリングを行い、それに基づいて建設をしたとのことであった。こうすることで、無駄な出費がおさえられ、両者にメリットをもたらすことができている。また子育て世帯にも配慮された構造は印象的で、特に図書館の間取りなどはよく考えられていると感じた。

石巻市大川小学校

（内容）

宮城県石巻市の大川小学校で、当時小学校4年生の息子さんを亡くしたご遺族佐藤氏により、当時の状況の説明や想いを伺った。

<笹本委員>

今回の委員会視察（令和6年5月27日～29日）先は、①宮城県美里町議会、②震災遺構「大川小学校」、③岩手県陸前高田市議会、④岩手県紫波町「オガール」等であった。

①においては、「デマンドタクシー」、「コミュニティ事業」、「地域おこし協力隊」、「自主防災事業」等について学んだ。

同町の人口は約23,000人であるが、この数値は近年減ったり増えたりした訳ではなく、この数値をキープしている、という点に着目した次第である。当然、これは同町の人口社会減をなくし、かつ社会増を目指す施策によるものと思われるが、特に私が着目したのは、同町イメージキャラクターである「みさとまちこちゃん」である。

「みさとまちこちゃん」は、ありとあらゆる町の行事に登場し、しかも当該行事に合わせた「動態」で出演する、という。これが、同町民の「地元愛」を形成する、何気ない町としての努力なのではなかろうか、と推測できた。本町においても、町民の方が町政100周年を記念して「ミューシーくん」という非

公式キャラクターが存在するが、意外と人間の心理はこうした存在に依るところが多いと感じており、100周年事業終了後も「ミューシーくん」のような町イメージキャラクターは必要である、と改めて感じた次第である。

紙幅の都合上、学んだこと全てを記せないが、「デマンドタクシー」には、着目した。高齢ドライバーによる池袋暴走事件等を契機に免許証返納の動きは大都市ではみられるとされるが、「車が移動のための生活必需品」となると、高齢で運転することへの危機意識は抱きながらも、どうしても利便性を選択してしまうのが、地方における実態である、といえよう。

地元紙にも掲載されていたように、本町長柄の高台にある住宅地（葉桜団地・イトーピア）から町内への移動手段が少なく、町内においては「陸の孤島」、買い物等の用事を済ませるなら逗子市街へバスで行ってしまう方が手取り早い、という現状には、町内の活性化をみすみす減退化させている、機会費用の損失でもある、と憂慮している。

美里町の現状に話を戻すと、旧小牛田町と旧南郷町が合併した同町ではあるが、両地域間の移動が困難であるという（一応、路線バスはあるものの）。そこで、同町は南郷地域に「デマンドタクシー」導入をする際に、「民業圧迫」（同地域にはタクシー会社1社あり）にならないよう、当該タクシー事業者の赤字分につき、補助金で補填する等の条件を整備する等の施策（同町が同県栗原市視察時の事例を参考として）を取ったのである。

②の「大川小学校」は、東日本大震災の際、校舎が津波にのまれて児童や教職員のほぼ全てが亡くなった痛ましい事件の現場である。14時46分の大震災発災後、児童教諭らは、同校校庭に集まったが、結果として裏手の山に避難すれば助かった命が、津波により奪われた事件である。

児童遺族らを原告とする民事上の国家賠償請求事件の裁判は、仙台高裁で石巻市・宮城県に瑕疵あり、として、石巻市・宮城県は最高裁に上告するが、最高裁は上告を認めない決定をくだし、本件は裁判上では原告側遺族が勝訴している。

1審の仙台地裁での判決は、「想定外」の災害に教職員らに瑕疵があったとするのは酷である、との趣旨であったが、仙台高裁は、予め県・市・教育委員会らが策定した「ハザードマップ」自体が信頼するに足りないものであり、かつ同小学校ではまともに避難訓練も行っていなかった等の争点により、仙台高裁判事が現場臨場（裁判での現場臨場は、下級審での判決が大きく変更される可能性がある場合に行われるとされる。）の結果、県・市等に瑕疵があり、原告勝訴となったものである。

ただ、現場で「語り部」として「ガイド」をしてくださる方は、原則とし

て、遺族関係者の方々であり、裁判上の勝訴はあまり関係がなく、わが子の死をムダにしないよう、訪れる私たちに感情を押し殺し、後世や全国へこの教訓を知らしめてくださっているのである。同時に、遺族ご自身にできる、やり場のない憤りやグリーフケアの一環として機能するのであれば、せめてもの一筋の光はあろう、と感じる。

③は、本町と人的縁もあってか、市長までがご挨拶をされ、また東日本大震災津波伝承館における時間配分も完璧なご案内の方が言われた「津波てんでんこ」に深く考えさせられるところがあった。また、同市の職員の方が伝承館見学を終えても、松原を津波が襲いかかった海岸、「奇跡の一本松」につき、熱心にご説明をいただき感銘を受けた。

また、私たちが発災直後にテレビ等の画面越しに観た「一本松」は、その翌年には「枯死」が確認され、その DNA を継受させ、また困難な屋外保存に様々な努力の結晶があることを知り、改めて感銘を受けた。

④の岩手県紫波町における公民連携によるまちづくり「オガールプロジェクト」について学んだ。複雑な不動産売買等についての経過は省略するが、紫波町役場と民間企業が連携して、田畑であった町有地を町民が集える「まちづくり」を行ったものである。人口は、本町とほぼ同じであり、特別に人で賑わうという印象ではなかったが、「身の丈（人口・経済規模等）に合った」利用のされ方がされて、確実にお金が落とされて行き、町も町民も win-win であるならば、こうした発想も本町にあっては、ヒントになるのではないかと感じた次第である。

< 中村委員 >

《美里町》

美里町は平成 18 年に小牛田町と南郷町が合併して誕生した、宮城県北東部に位置する町である。仙台市とは約 40 km の距離、東北本線で乗り換え無しで 45 分という通勤・通学圏内に位置し、人口は 23,024 人（令和 6 年 5 月 1 日現在）である。

予算規模・財源構成が葉山町と大きく異なるので比較してみたところ、美里町の令和 6 年度予算は一般会計が 144 億円で本町の 1.13 倍、町税は 26.7 億円で 0.46 倍、地方交付税は 40.7 億円で 3.2 倍、国庫支出金が 23.1 億円で 1.6 倍、町債費が 25.4 億円で 3.0 倍であった。この違いは、両町の姿勢・政策の故か、地方財政制度によるものか。

○デマンドタクシー

美里町は大きく 2 つの地区に別れており、タクシー事業者は小牛田地区に 2 社、南郷地区に 1 社ある。デマンドタクシーを運行しているのはそのうちの南郷地区だけで、地区内で営業しているタクシー業者と令和 6 年 4 月 1 日～令和 9 年 3 月 31 日までの 3 年契約を締結して運行している。運行車両は 2 台で、運行回数は 1 時間に 1 本を基本に混雑時の対応は事業者の判断に任せている。利用は、電話予約による。

国等関係機関への申請業務、利用者からの予約受付、停留所の設置管理、運賃収入等に係る経理その他運行に係る一切を運行事業者が行っている。

利用者の 9 割は病院の通院利用で、買い物利用はほとんど無い。地区内にはスーパーが 1 社あるのみ。

美里町には、平成 20 年から道路運送法第 4 条許可業者による有償運送(乗車 100 円)として、町の委託によって運行している住民バスがあるが、南郷地区を運行する 2 路線の廃止に伴い、平成 27 年度から南郷地区でのデマンドタクシー(1 乗車 200 円)の運行を開始したもの。

毎年 10 月頃実施しているアンケート調査の結果では、「現行の運賃で満足しているのでこのままの運行形態でお願いしたい」、「予約を簡素化して欲しい」、「利便性が向上するのであれば運賃が多少高くても構わない」等の意見がある。

隣町の病院や小牛田地区など地区外への移動を求める声があるが、タクシー会社の営業区域による制約と民業圧迫の問題があるほか、利用距離が伸びることによる町財政圧迫の問題があるため、検討が止まっている。また、オンライン予約システムの導入が課題となっている。

町では、人口減少対策を講じながら、引き続き地域の足を確保する必要があるとしている。

○コミュニティ事業

美里町は 6 つの地域に分かれており、それぞれの地域にコミュニティ活動の拠点であるコミュニティセンターがある。運営は、地域住民で組織された協議会(4 か所)、社会福祉協議会、シルバー人材センターが指定管理で行っており、1 人当たり 315 万円を限度として町から 2 名分の人件費補助がある。これとは別に、町内の 66 行政区に対して、地域づくり支援事業補助金が 5 万円+(450 円×世帯数)を上限として交付されている。対象事業は、一般コミュニティ事業、青少年育成事業、高齢者健康推進事業、自主防災・自主防犯事業となっている。

《陸前高田市》

岩手県の東南端、三陸海岸の南の玄関口として、大船渡市、住田町、一関市、宮城県気仙沼市に接し、宮城県との県際に位置している人口 17,812 人(令和 5 年 3 月 31 日現在)の市。

気候は、三陸沿岸に位置しているため、海洋の影響と地理的条件から四季を通じて比較的温暖で、岩手の湘南と言われている。

○民泊修学旅行

ボランティアの宿泊場所の不足と確保、廃校の校舎の活用、防災・減災の教育旅行等のニーズから 2015 年に 3 軒で始まった民家農泊が始まりで、2018 年に民泊として 180 軒で開始され、現在は N P O 法人 S E T が運営している事業。S E T は、東日本大震災をきっかけに任意団体として生まれ、2013 年に法人化され「まちづくり・ひとづくり・社会づくり」をテーマに、民泊や学生向けのキャリア教育、社会人向けの研修、人が集まるコミュニティの場づくりを通して「まち・人・社会」のつながりをつくり続けている団体で、2023 年 5 月に総務省の「ふるさとづくり大賞」を受賞した。

コロナ禍で 2020 年～2022 年は修学旅行の受け入れがなかったが、これまでに 1 万人超の修学旅行利用があった。修学旅行以外では、一般企業・大学・インバウンドの民泊・地域課題解決スタディツアー・中期移住留学などの利用がある。

この事業は、民泊ではなく農林水産体験をする農泊として、体験料は 1 万円/人、そのうち 5 千円～6 千円を民泊家庭に支払い、S E T には 310 万円(年額?)を支払い、200 万円を人件費、100 万円を運営費に充てているとのこと。5 千人の参加者があれば独立採算が可能ではないかとのことであった。

現在は、コロナ禍で減った利用を取り戻すのに苦労しているが、陸前高田市のファンをつくるためにも引き続き取り組んでいきたい事業とのことである。

○グリーンスローモビリティ(モビタ)

グリーンスローモビリティは、時速 20km 未満でゆっくり走る小型の電気自動車で、観光施設や商業施設、災害公営住宅などを結ぶ、市民や来訪者の交通手段としてスタートした。1 台 1,600 万円で 2 台保有している。平日は一乗車 100 円、土休日は 1 日乗車 500 円である。2023 年度の利用実績は、休日便と平日便合わせて、運行日数は 242 日、乗車数は 4,146 人だった。

市庁舎構内で試乗させてもらった。車内にはテーブルが取り付けられていて 5 人ほど乗車できる。移動の役割だけでなく町民のコミュニケーションの場ともなっていると。坂道は苦手とのこと、本町のように坂道が多く、交通量の

多い地域で運行するには課題がありそう。今後、技術進歩と量産化で性能の向上と低価格化が進んだ場合、本町一部住宅地区等での導入はあり得るか？

○デマンド交通(予約型乗合タクシー)

3社のタクシー会社が設立したタクシー協会に委託して実施。年間の経費(委託費)は約400万円。走行距離数に基づいて毎月市に請求がある。3エリアに分けて運行しており、2023年度の利用実績は合計1,219人。利用は、自宅とバス停留所間となっている。予約センターは、駅前のタクシー会社に置かれている。

仮設住宅からの利用など、定時の空バス運行よりも有効と判断して実施している。

○ふるさとタクシー助成事業

75歳以上の自動車免許証の無い高齢者または重度の障害者手帳をもっている障害者を対象に、社会参加の促進・買い物・通院等の利用を目的にタクシー助成券を発行し、料金の一部補助を行っている。

1枚あたり500円の助成券で地域毎に定められた月1枚から6枚を交付している。

《石巻市立大川小学校》

石巻市震災遺構大川小学校の敷地内にある大川震災伝承館の前で、大川小学校児童遺族で、大川伝承の会・小さな命の意味を考える会の佐藤和隆氏から説明を受けた。説明を受けた後、校庭に接した裏山に登って周辺の状況を確認することができた。裏山に登る斜面は老人の私にも問題なく登れる程度の斜度で、なぜすぐ裏山に避難しなかったのだろうかという疑問はさらに強まった。

仙台地方裁判所の1審判決は、当日の避難行動の過失を認め、危機管理マニュアル等の事前体制の義務違反について問わないものであったが、仙台高等裁判所の控訴審判決は、地震発生後の個々の教師の判断の是非には触れず、地震が発生する前の段階で市教委や学校がなすべき防災対策をしなかったことを違法と判断し、原告勝訴となった。その後、最高裁で宮城県・石巻市の上告が棄却され、仙台高裁の判決が確定した。

佐藤氏からは資料にない校長や生存教師の話などを聞くことができたが、緊急事態に直面した時、最後は日頃からどう備え判断力を高めておくかが何よりも重要であると痛感した。私自身を改めて問う機会になった。佐藤氏からは、議員としての責務についての指摘もいただいた。公的な立場にいる自身の責任の重さを感じたところである。

《紫波町 オガールプロジェクト》

紫波町は、岩手県のほぼ中央、盛岡市と花巻市の間に位置し、紫波中央駅から盛岡駅まで 16.7 km、21 分の距離にある。古くから物流の拠点として賑わい、南部杜氏発祥の地でもある。人口は 32,953 人(令和 5 年 9 月 20 日現在)で微減。令和 5 年の地価は 46,600 円で、前年の 9.3%増である。

○オガールプロジェクト

新駅設置運動により平成 10 年に紫波中央駅が新設された。乗降客確保のため駅前の 10.7 haの土地を住宅供給公社が取得し、宅地分譲と公共施設集約を行う計画があったが、実質公債費比率の上昇や基金減などのため塩漬け状態になっていた。

平成 19 年、藤原前町長のリーダーシップのもと、PPPを担うキーパーソン岡崎正信氏と東洋大学との連携を軸に「公民連携によるまちづくり」が始まった。

平成 21 年 2 月に紫波町は、町有地を活用して財政負担を最小限に抑えながら、公共施設整備と民間施設等立地による経済開発の複合開発を行う「紫波町公民連携基本計画」を策定し、翌 3 月議会で議決した。

その後、事業説明会を町民に 100 回、議会に 100 回と、町民を挙げた取り組みを進め、現在のオガールエリアが誕生した。

視察当日は、紫波町職員としてこの事業に関わり現在はオガール企画合同会社社員の方の説明と案内を受けた。

有意義な示唆を受けた 2 点について整理しておきたい。

まず 1 点目は、オガールプロジェクトの説明資料にある「オガールプロジェクトの手順」と「逆アプローチの不動産開発」である。

通常、我々は必要な施設、欲しい施設があって、その前提から出発して施設の種類や規模を固める手順に入っていくが、本プロジェクトでは、まちづくりは「人」ではなく「不動産」であるとして、「不動産価値の上昇」を判断基準とした。

即ち、「消費活動を目的としない訪問者を増やすこと。おもしろい人にたくさん来てもらうこと。人が集まれば自ずと付帯サービス産業が発生する。エリアに活気が生まれれば高い不動産でも購入してくれる層が集まって来る」。それがまちづくりを「不動産」として開発事業を進める所以であると理解できる。こうした考えから、このプロジェクトは「家賃相場の確認」、「テナント誘致&調査」、「必要床面積の設定」、「入居率 100%の実現」を起点にスタートして設計・工事に入っている。

2 点目は、上記 1 点目の方針を実現する手法として、P P P を徹底的に追求している点である。

本プロジェクト推進にあたって設立された企業は、企画設計から関わってきたオガール紫波(株)、町が土地を賃貸してオガールベースを整備・運営している(株)オガール、役場庁舎を整備・維持管理している紫波シティホール(株)、エネルギーステーションを整備・運営している紫波グリーンエネルギー(株)、オガール紫波(株)が出資してオガールセンターを整備・運営しているオガールセンター(株)とオガールプラザを整備・運営しているオガールプラザ(株)の 6 社に上る。また、説明の中にミントという語が出てきた。調べたところ、一般財団法人民間都市開発推進機構(MINTO 機構)のことであった。昭和 62 年に設立された団体で、「民間都市開発の推進に関する特別措置法」(昭和 62 年法律第 62 号)に基づく民間の都市開発を推進するための主体として、国土交通大臣の指定を受けた一般財団法人だった。民間都市開発事業に対して安定的な資金支援など多様な支援を行っている団体とのことで、民間の事業視点や民間金融機関の融資等の面で、行政も知っておいたら役に立つかも知れない。今後財源確保が厳しくなる中で、オガールプロジェクトの例は示唆的である。葉山のサッポロビール保養所の活用に応用できないか、と説明を受けながら想ったところである。

P P P の 1 つの具体例として、葉山町の執行部の皆さんも調査に行かれたら如何かと思う。当日も 2 つの自治体から調査に来ていたようである。

< 荒井委員 >

1 宮城県遠田郡美里町 (5 月 27 日)

視察項目は、デマンドタクシー、コミュニティ事業、地域おこし協力隊、自主防災事業についての 4 項目である。その中でも近い将来、本町においても導入に向けた研究・検討が必要となってくるであろうデマンドタクシーについて報告します。

(デマンドタクシー)

平成 27 年 3 月 31 日に美里町住民バスの路線の終了に伴い、同年 4 月から運行開始。

美里町は平成 18 年 1 月 1 日に旧小牛田町と南郷町が合併した誕生した町である。

現在の運行地域は旧南郷地域で、1 乗車につき 200 円となっているが、小学生以下、身体障害者、知的障害者及びその介護者 1 名は無料。

また、該当地区は令和３年４月一部過疎地域に認定されている。

デマンドタクシー運行業務を契約期間３年間として、地元のタクシー会社１社と締結し車両２台で運行している。

運行業務契約の項目には、運行に係る国等の関係機関への申請業務、利用者からの予約受付、停留所施設の設置及び管理、タクシー車両の管理、運賃収入及び運行に係る経理、その他運行に必要な作業等一切となっている。

業務の実施に伴い利用実態や利用者のニーズを常時把握し、運行方法等再検討を必要に応じた改善を行うとされています。運行回数は、１時間に１本を基本としているが、混雑時においては臨機応変に対応をしている。

現在、毎年１０月に利用者からのアンケート調査を行い、アンケートに記載された要望を基に公共交通会議に諮り、ダイヤ改正を実施している。

現在の利用者の８割以上が７５歳以上をしめており、アンケートでは行先の９割が病院となっている。

町の今後の課題としては、地区外への移動も求める声があるので、更に利便性の向上の検討と電話予約となっている申請以外の予約システムの構築（オンライン予約システム）が近々の課題と認識されていた。

過去６年間の利用者数はＨ２０年２,８７７、Ｒ１年２,６２１、Ｒ２年２,０９９、Ｒ３年２,３８２、Ｒ４年２,７１９、Ｒ５年２,６５６（Ｒ２年からは、コロナの影響があり、減少傾向）。この事例の場合は病院に行くことが主であること。また、免許を返納した方々である。葉山での導入は、可能であると思います。

２ 岩手県陸前高田市（５月２６日）

視察項目は民泊修学旅行の仕組み、グリーンスローモビリティとデマンド交通、免許返納者の増加による公共交通の必要性を想定した市の予算の見通しについての３項目である。その中でも近い将来、本町においても導入に向けた研究・検討が必要となってくるであろう、グリーンスローモビリティとデマンド交通について報告します。

現地に伺って判明したことではあるが、財源は８億円を超えるふるさと納税から運用資金に当てられているとのこと。

当日はあいにくの雨であったがグリーンスローモビリティの乗車体験をさせて頂いた。聞くとところによると２台を現在所有していて、定価１台１,６００万、国産車（群馬県内で製造）で事業費の半額が国からの助成金。

担当のまちづくり推進課作成の「陸前高田市の地域公共交通マップ」には、市全体の交通手段が１０ページに渡り各路線別の行き先や停留所まで詳しく記載されている。

愛称を「モビタ」と名付け、月曜日・火曜日・水曜日に運行し、市役所前を起点とした泉団地循環線と中田団地循環線の2路線。1乗車100円で1日3便運行。

その他、土曜日・日曜日・祝日に運行する道の駅高田松原と陸前高田駅等を循環する道の駅循環は、500円で1日乗り放題となっている。なお、便数は12便。

デマンド交通は頂いた資料では小友町・広田町のお住まいの方と気仙町にお住まいの方、矢作町第15区・16区にお住まいの方の3コースで、料金体系は中学生以上一律300円、小学生・介護人は150円、未就学児・身障者無料である。フリーダイヤルで予約する。

＊陸前高田市の担当者からは、免許返納者が増えたことと認知症の患者数が、増えてきている傾向が見られる状況である。との発言があり、わが町の数値も気になる。

＊葉山町での取り組みの場合は、京浜急行バス路線との兼ね合いの調整が、必要不可欠である。また、町全体ではなく、特定の地区での運用開始が望ましいと思います。

課題として大事なものは、運営資金をどうするのかで、当町ではふるさと納税が課題となっているので、この事例と同様な取り組みに関しては、更に研究・検討を重ねていく必要のある事業だと思う。

3 岩手県紫波町オガールプロジェクト（5月29日）

岩手県紫波町は、昭和30年に1町8カ村が合併で誕生した。

「オガール」の名の由来は成長を意味する紫波の方言「おがる」と紫波中央駅前（紫波の未来を創造する出発駅とする決意）とフランス語で「駅」を意味する「Garu」（ガール）を合わせた造語。

このエリアを出発点として紫波が持続的に成長して行く願いを込めたプロジェクトについて、オガール企画合同会社の主催（有料）での135分の標準コースの視察に参加した。参加者は当委員会の他、福島県南相馬市の担当者（2名）や北海道内の建築設計事務所の方々（5名）等。

＊事業手法としてPPP（PFQ、RFP）、PFI（BTO）等があり、説明の中でも、社会資本整備交付金の記載があったので、私自身も現在社会資本整備交付金の活用を推進した公園整備を要望していたので、当町でも更に研究・検討をお願いしたい。

4 施設見学

石巻市震災遺構大川小学校（5月28日）

この場所は「いのちについて考える場所」となった。

当日は雨にもかかわらず、施設見学に訪れた小中学生であろうかバス4台が停車していた。

＊津波により命を落とした子供の親からの詳しい体験談を伺った。地震発生からの状況や事実、裁判での判決や今後の課題等、メディアで報道されていない多く事実を聞くことができた。

<土佐委員>

◎宮城県美里町

コミュニティ事業、自主防災事業、デマンドタクシーについて

面積は葉山町の5倍弱もある75km²。縄文時代は海だったのか貝塚があるそうです!? 海拔は10-13mで田園が広がり山はない。

・町の南側に美里町住民バスが運行されていたけれど、それは廃止され平成27年度からデマンドタクシーを運行している。主な行き先は病院でアンケートの回答者のうち9割が利用している。

職員の説明では、葉山町の場合は町外の逗子駅にバス停を設置することは、制度上は問題ないそうです。

・出前講座は38ものメニューがあるけれどコロナ禍だったこともあり実績は多くはない。しかしながら以外のリクエストにも対応しているとのこと。

・コミュニティ事業では、とても人気のあるものに「ちびっこ相撲大会」がある。5月26日に千秋楽を迎えた大相撲夏場所に新十両として出場した時疾風関は美里町内の高校出身で、町でお相撲の人気があることがうかがえる。

・地主防災事業で消防本部を定年した職員が、防災安全課の地域防災指導員として地域の要として活躍されている。「災害は忘れたころにやってくる」のではなく、「災害は忘れる前にやってくる」!という言葉が腑に落ちる。町内には15基のセーフティタワーがあります。わたしの認識では普通は地下に貯水するものと思っていたけれど、タワーなら自然落下のため汲み上げる必要がない。また洪水があっても利用できるの有効だそうだけれど、葉山町にはあまり必要のないかもしれないと感じました。

もっと質疑をしたかったところなのだけれど、電車が3時間に2本くらいしかなく後ろ髪を引かれました・・・

◎石巻市震災遺構大川小学校

東日本大震災で当時、大川小学校 3 年生だった息子さんを亡くした方からお話を伺うことができました。

救える命を救えなかった・・・

明らかに人災だと感じる。

報道などでは小学生の児童では裏山に駆け上がることは、できないなどと聞いてそのように認識していたけれど、日ごろより課外授業で山に上がっていたことを聞いた。津波避難訓練で校庭に集まることしかしていなかった。避難場所は近隣の空地・公園となっていたけれど、実際には近隣に公園はないこと・・・説明してくださった方からは「葉山町で町民の命を守るお仕事をしてください」と託されました。

◎陸前高田市

コンパクトシティの実現、民泊事業、デマンド交通 について

・グリーンスローモビリティのモビタに実際に乗車することができました。車内には「のびたじゃないよモビタだよ」と書いてあります。公共交通や市民の足という位置づけではなく、コミュニティの一部というところがとても面白い。誰でも 1 回 100 円で乗車することができます。モビタ以外にも B R T もある。また、通院や買い物・社会参加などの日常生活を支援する新たな交通として「デマンド交通」を運行しています。予約型の乗合タクシーのことで、乗り合う方の自宅を順番に迎えに行き、目的地の停留所まで送るサービスのことです。葉山町でも実証実験が始まるのでとても楽しみです。多くのみなさまに利用してほしいと思います。

・市長のアドバイスにより東日本大震災津波伝承館や「奇跡の一本松」の説明を受けることができました。

「あなたの行動が、未来をつくる」～知恵と技術で備え、自ら行動することが重要です～ という言葉がとても大切なことです。佐々木市長をはじめとして陸前高田市と岩手県の職員のみなさま、ありがとうございます。

◎オガール紫波プロジェクト

紫波中央駅前にずっと塩漬けになっていた土地に、役場庁舎や図書館・保育園・医院などなどがあります。日本で初めてのバレーボール専用コートや、岩手県フットボール協会のサッカー場もある。エネルギーステーションでオガールタウンのエネルギーを賄うことができる。無電柱化でとても空が広く青いことが印象的です。人口は微減だけど小学校のクラスが足りなくなる。保育園は保育士さん不足もあり、待機児童がいます。

P F I 方式による地場木材をふんだんに使用した、木造 3 階建ての役場庁舎がとても素敵です。図書館の天井がとても高いのですが、1.5 階分の高さがあることが大事なようです。

オガールプラザはとても閑散としていましたが、3 万人の町としてそれで良いそうです。週末にはいろいろなイベントがあり、とても賑わいがあるとのこと。そちらの様子も見てみたかったです。芝生の広場などとても心地よく、公民連携の成功例と感じました。

以上、ご報告いたします。

令和 6 年 6 月 21 日

総務建設常任委員会